

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 16 日現在

機関番号：12701

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23330067

研究課題名(和文) 功利主義と公共性：「経済」は人々に「幸福」をもたらすか？

研究課題名(英文) Utilitarianism and Public Sphere: Does Economy Bring People Happiness?

研究代表者

有江 大介 (ARIE, Daisuke)

横浜国立大学・大学院国際社会科学研究院・教授

研究者番号：40175980

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,700,000円

研究成果の概要(和文)：以下の3点において成果を挙げる事ができた。第一に、わが国で遅れていた功利主義研究活性化の端緒を開いた。第二に、第13回国際功利主義学会横浜大会(平成26年8月)を成功裏に開催し、総報告100余本の半数の日本人報告により当該研究の国際的発信に貢献した。第三に、本研究課題の代表者、分担研究者、連携研究者などが中心メンバーとなり、わが国功利主義研究史に画期的な出版である『ベンサム挑戦』(ナカニシヤ、平成27年2月)を刊行し、現在、『功利主義と公共性』(仮題)の刊行準備中である。

研究成果の概要(英文)：Our project has produced the following three remarkable results. First, it created an opening the beginning of the activation of utilitarian scholarship in Japan that had been long time stagnated. Second, the project supported the XIIIth conference of the International Society for Utilitarian Studies held in Yokohama August 2014 in providing Japanese scholars' many papers, organizing the conference and contributing to the overseas dispatch of Japanese research result. Third, people who were the principal investigator, co-researchers and other related scholars played a major role of the publication of the epoch-making book titled The Challenge of Jeremy Bentham (2015) and also now prepare the other book titled Utilitarianism and Public Sphere (provisional).

研究分野：18-19世紀ブリテンの経済思想、特にスコットランド啓蒙やベンサム、ミルにおける功利主義思想と経済学

キーワード：功利主義 公共性 幸福 厚生経済学 パニプティコン ベンサム J.S.ミル

1. 研究開始当初の背景

(1) 20世紀後半、J. ロールズやA. センの登場以降、功利主義は社会的正義、公平さ、富の分配等の公共性を担保できないと徹底的に批判されて来た。英語圏やヨーロッパ先進国だけでなく、わが国や社会問題を抱える発展途上国でもそうした状況は広く見られた。しかし、以上の批判は、現実の経済(学)や経済政策の判断がなぜ実際には功利主義的判断に基づいているのかについて十分な評価を示していなかった。

(2) また、わが国ではマルクス主義の大きな影響力によって、現代功利主義思想の基礎を確立したベンサムやミルへの関心および功利主義研究自体への関心が極めて低い時代が続いていた。本研究は、そうした学問状況を変えるものとして開始された。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は以上の状況に対して、幸福を目指す価値理念、或いは現実の政策判断の基準としての功利主義は決して棄却され得るものではないことを、経済の思想・理論・政策の歴史、貧困解消や所得再配分のための経済分析と実行可能な政策の方法、これらに通底する政治思想・哲学等を総体として検討することを通じて示そうとした。

(2) 具体的には、ベンサムやミルの古典的功利主義の再検討から出発し、経済思想史および公共哲学的視点より功利主義の意義を確認し、社会から求められるウェルフェア、幸福、社会的正義などの現実的な意味内容を確定し、本研究課題の視点から厚生経済学、現代の公共学の対応を評定し、所得再分配を基礎とした現実的な幸福を目指す政策的枠組みを提示することを目指した。

3. 研究の方法

(1) 人文・社会科学領域の共同研究の前提として、経済思想、政治思想、福祉経済論などの領域の個々の研究者が、功利主義の古典テキストの検討を行い、自分の生きた時代の諸問題に経済学者や政治思想家たちがどのように対応したのか、現代の最大の問題である所得再分配の過度の不平等さその中での幸福とは何かを追求する。

(2) 以上を踏まえて、適宜当該研究課題に関する研究集会を開催して討論する。その際、可能な限り当該科研費以外の研究者、外国人研究者を招聘して知識提供を受けつつ討論する。また、外国学会に本科研費メンバーを派遣しての発表を行う。こうした機会を国際交流およびわが国からの研究発信の場とする、という共同研究の方法を採る。

(3) 第三に、本科研費にとって、上記(2)の最大の機会として第13回国際功利主義学会横浜大会(ISUS XIII、横浜国立大学、平成

24年8月)を位置づけ、前年からの大会準備研究会、大会それ自体、および大会後の成果刊行に向けての研究集会を重ねるという方法で本研究課題の追求を行った。

4. 研究成果

全体として、以下の3点において成果を挙げることができた。第一に、わが国で遅れていた功利主義研究活性化の端緒を開いた。第二に、第13回国際功利主義学会横浜大会(平成26年8月)を成功裏に開催し、総報告100余本の半数の日本人報告により当該研究の国際的発信に貢献した。第三に、本研究課題の代表者、分担研究者、連携研究者などが中心メンバーとなり、わが国功利主義研究史に画期的な出版である『ベンサムの挑戦』(ナカニシヤ、平成27年2月)を刊行し、現在、『功利主義と公共性』(仮題)の刊行準備中である。

以下、分野の特性に鑑み経年的に具体的に成果を示す。

(1)平成23年度は、同年3月の東北大震災の影響で研究計画の大幅な変更を余儀なくされたが、当初からの研究目的と実施計画にできるだけ沿うべく次のような連続する研究集会を開催した。

・第1回研究集会「功利主義と公共性」(2011年7月23日、同志社大学)

・第2回研究集会「公共性とは何か」(2011年10月28日、名古屋大学経済学部)

ここでの主要報告は研究分担者・山岡龍一による「公共性とは何か：政治哲学からの展望」であり、その最大の成果はわが国のアカデミズムにおける「公共性」概念の標準的理解がその問題点とともに本科研費メンバーに共有されたことである。

・第3回研究集会「功利主義、公共性、経済 [Utilitarianism, Public Sphere, and Economy]」(2012年3月24日、慶應義塾大学・三田校舎)

ここでの3報告では、主にベンサムにおける法思想、経済思想、功利主義の相互関係がテーマとなり、それが現代においては功利主義と公共性と経済学についての密接な関係の問題であることが明らかとなった。特筆すべきは、発表者の1人がイタリア・ピサ大学の Marco Guidi 教授であったことにより、わが国の関連各分野での翻訳語としてのキーワードが、一見同じ言葉を使用しているのに見えてその内容理解が彼我で必ずしも共通ではないこと、などが問題点として改めて抽出できたことである。その例が、日本語の抽象名詞「公共性」もっとも対応していると思われるドイツ語 Offentlichkeit と、その英訳 public sphere の内容が相当に異なることが確認された点である。これはその後の議論にとって有益であった。

報告は「Is there a Political Economy of Legal Procedure in Bentham's Works?」

(University of Pisa, Italy)、「Three Dimensions of Classical Utilitarian Economic Thought: Bentham, J. S. Mill, and Sidgwick」中井大介(近畿大学)

「Utilitarianism and Economic Ideologies」橋本努(北海道大学)の3本であった。以上により、功利主義の位置づけが批判される一方で、公共性とは何かが明瞭ではないことが確認されたことを成果として挙げたい。

(2)平成24年度は、第一に、功利主義の政治思想やそれにもとづく政治制度が近代化を目指す19世紀後半の日本をはじめとした東アジア諸国にどのように受容されたのかについて、以下のようにアメリカ、中国、韓国の研究者を招聘し国際ワークショップ(第4回研究集会)を開催した。横浜国際ワークショップ'Translating the West, Past and Present: Japan, China and Korea'、6月16日-17日である。ここでの主報告は、Suh Byong-hoon(徐炳勳)教授(韓国・崇実大)、Richard Reitan教授(米国・Franklin & Marshall College)、Li Xiaodong(李曉東)教授(University of Shimane)、Yuri Kono(河野有理)教授(Tokyo Metropolitan University)であった。ここでは、既出の翻訳語の問題とともに、ほぼ同時期にベンサムやミルの功利主義政治思想が移入した中国では、わが国とは相当に異なった仕方です「受容」されたことが指摘された。これまでほとんど語られてこなかった歴史的事実の確認として1つの成果と言える。

第二に、本科学研究費による研究の主要な側面である、功利主義とその経済政策の背後にある理念と思想に絞った、下記の第5回研究集会を慶應義塾大学三田校舎にて開催した(12月15日)。主報告は、川俣雅弘教授(慶應義塾大学)「公共性と世代間の公平性」および山崎聡准教授(高知大学)「ピグーのマニフェストから見た狭義と広義の厚生経済思想」であった。

第三に、所期の研究計画に基づき、第12回国際功利主義学会(ISUS XII)ニューヨーク大会(2012年8月8日-11日)にて研究代表者・有江大介、および研究分担者・中井大介がそれぞれ功利主義と宗教との関係、経済思想についての研究発表を行った。また、次年度8月期に開催される国際功利主義学会(ISUS)横浜大会に向けて、関係研究者の協力を得て2度の準備会議を開催し(11月23日・横浜国立大学、平成25年3月2日・同志社大学)大会の統一研究テーマ、個別研究発表の組織化など、全体的な検討を開始した。これらはいずれもわが国功利主義研究の国際発信に向けての成果の1つと言える。

(3)平成25年度は、26年度の第13回国際功利主義学会横浜大会(8月20-22日)での研究成果発表の準備期間と位置づけて個人研究の進捗と準備に重点をおいた。その中で、研究代表者は現代最大の功利主義批判家であるA.センが基調講演'On Smith's and

Hume's Critique of Imperialism'を行った国際アダム・スミス学会18世紀スコットランド学会合同大会(パリ大学・ソルボンヌ、7月3日-6日)に参加し討論をするとともに、経済学と所得分配の不平等にかかわるパネルの司会を務めた。この大会参加の成果は、センやその同調者たちがあくまでも所得分配の不平等性を現代社会の最大の問題として捉え、それを問題として捉えきれない功利主義と現代の新古典派経済学に対して強い批判をもっており、そうした視点でスミスなどの古典を再解釈しようとしている方向が明らかになったことである。

次年度の国際功利主義学会の準備研究会として開いた第6回研究集会では、研究分担者・中井大介氏(近畿大)「経済学におけるパターンアルアイディア」、知識提供を求めた山崎聡氏(高知大)「功利主義と優生学」と加藤晋氏(首都大)「功利主義と社会選択理論」により、経済学と功利主義が不可分な関係にあること、功利主義を簡単に棄却できないことが相互に確認されたことが成果である。

(4)平成26年度は、研究代表者所属の横浜国立大学で開催された第13回国際功利主義学会横浜大会(ISUS XIII: 8月20日-22日)を、当初の予定通りわが国における功利主義研究の成果発表と国際討議と国際発信の場とすることに注力し、計12ヶ国100本以上の報告と半数の日本人報告を得たことは、内容の前に本科学研究費共同研究の大きな成果と言える。

また、第7回研究集会を開き(横浜国立大学:平成27年3月7日)科学研究費メンバーのうち上記ISUSでの報告者が大会での討議を経た修正版の報告を行い、それを含めた本科学研究費の研究成果刊行に向けての取り組みの出発点としての意義があった。

(5)平成27年度では、前年の第13回国際功利主義学会横浜大会に集約された当該課題研究を、1つの成果として刊行することを目指した。また、多くの本科学研究費メンバーも参加した『ジェレミー・ベンサムの挑戦』(ナカニシヤ出版、2015年2月)刊行に象徴されたわが国における功利主義研究の新たな高まりをサポートする研究活動に、本研究課題関係者として極力協力することに勤めた。さらに、共同研究の成果を『功利主義と公共性』(仮題)として刊行準備中である。

具体的には、「日本の功利主義研究を考える:『ジェレミー・ベンサムの挑戦』(ナカニシヤ、2015年2月)を手がかりに」と題する第8回目の研究集会を2015年8月8日(土)横浜・崎陽軒会議室にて開催した。以下、報告題目は永井義雄氏「ベンサムの失敗:最大幸福原理は“原理”たり得るか」、戒能通弘氏(同志社大学)「『ベンサムの挑戦』は何を目指したのか」、深貝保則氏(横浜国立大学)「功利主義研究の方向と方法:well-beingとdigital humanities」であつ

た。多数の参加者を見たこの研究集会は、本科研費によるわが国功利主義研究の新たな確立に向けての成果の一端を象徴したものであった。さらに、第9回研究集会を、関連するテーマの科学研究費（ID:15H03164「幸福、存続、ウェルビーイングの思想基盤」代表者：深貝保則）と共催にて「功利主義と公共性 功利主義はどこまで有効か?:法と経済と科学」と題して2016年3月5日（土）、お茶の水女子大学にて開催した。報告題目は、「小畑俊太郎氏（成蹊大学：当時）「最大多数の最大幸福」再考 不正義論としての功利主義」板井広明氏（お茶の水女子大学）「ベンサム功利主義とナッジ」有江大介（横浜国立大学）「功利主義研究の現状『功利主義と公共性』(仮)の出版計画に寄せて」であった。研究成果刊行のためのこの研究集会も、活発な討論を経て再び功利主義とは何か、公共性とは何かという本科研費にとっての最初の問題に立ち返った。

(6)最後に、この5年の成果を踏まえた今後の功利主義研究のあるべき方向を示唆しておこう。現代世界が“市場原理主義”と揶揄されるほどにアングロ・アメリカ的価値観に支配された経済社会であるとするなら、なぜそうなったのかについて考えるにはそのエッセンスである功利主義について本格的な再検討が必要であることが、改めて明らかとなった。このこと自体が、単に功利主義を批判することで事足りるとする近年の多くの議論の不十分性を指摘するという点で重要な達成と言える。この点の経済思想を基軸にした本科研費であるからこそ指摘できた成果であり、今後はニューロ・サイエンスなどの新しい科学との接点も持ちうると思う。また、欧米とともに、今後は少なくとも日中韓の当該分野の研究者との恒常的な連携がより実りある研究成果を得るためには必要であることも成果ともに明らかになった。

こうした全体が、わが国における功利主義研究の新たな高まりを生み出すことになると確信している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計18件)

1. 安藤隆穂「フランス自由主義の公共圏」『學士会報』913号、査読無、2015年、2-6
2. 中井大介「イギリス主流経済学における理想主義的側面：ポリティカル・エコノミーからエコノミクスへ」『イギリス理想主義研究年報』10号、査読無、2015年、19-27
3. 山岡龍一「所有権と領土権 規範的政治理論における主権国家概念の再検討」『政治思想研究 国家と圏域の政治思想』15号、査読無、2015年、30-57
4. 安藤隆穂「社会思想史 成立と確立の時代を生きる」『経済科学』62-4、査読無2015年、1-10
5. 板井広明「ベンサム功利主義的方法的基礎(1)」『東京交通短期大学紀要』20巻、査読無、2015年、55-67
6. 中井大介「イギリス経済学における理想主義的側面」『イギリス理想主義研究年報』11巻、査読無、2015年、1-2
7. 有江大介「田中秀夫編著『野蠻と啓蒙』(2014)を読む：我々はどちらの世界に住んでいるのだろうか」『経済論集』64-3・4、査読無、2014年、107-124
8. 有江大介「覚え書き：わが国のアダム・スミス研究の特色 水田洋氏の業績とAdam Smith's Library: A Catalogue (2000)から見て」『東京大学経済学部資料室年報』4号、査読無、2014年、16-24
9. 安藤隆穂「近代社会思想史のフランス自由主義を中心に」『社会思想史研究』37号、査読無、2013年、33-53
10. 安藤隆穂「東亜思想史中日本脈絡及其変容」『台湾大学 HIS Newsletter』8-4、査読無、2013年、7-13
11. 山岡龍一「逸れグレイハウンドの誇り？ 規範的政治理論と経験的政治理論の分業について」『政治思想学会会報』36号、査読無、2013年、1-6
12. 中井大介「イギリスにおける功利主義思想の形成：経済社会における一般幸福の意義を通じて」『社会科学研究』64-2、査読無、2013年、29-47
13. 中井大介「温経済知世 ヘンリー・シジウィック 功利主義の普遍的な価値を示した」『エコノミスト』8月14/21日号、査読無、2012年、60-61
14. NAKAI, Daisuke「書評：Medema, Steven C.: The Hesitant Hand: Taming Self-Interest in the History of Economic Ideas: Princeton on University Press, 2009, xiii+230pp」『History of Economic Thought』54-1、査読無、2012年、110-111
15. 山岡龍一「書評：包括的倫理協議と政治の構想 高田宏史『世俗と宗教のあいだ：チャールズ・テイラーの政治理論』を読む」『政治哲学』13巻、査読無、2012年、48-55
16. 有江大介「書評：中澤信彦『イギリス保守主義の政治経済学 パークとマルサス』(ミネルヴァ書房、2009年)」『社会思想史学会年報』35号、査読無、2011年、173-177
17. 山森亮「日本大震災と所得保障の必要性：ベーシックインカム要求が提起するもの」『大原社会問題研究所雑誌』634号、査読無、2011年、29-44
18. YAMAMORI, Toru "Controverses autour du revenu d'existence au Japon"『Informations Sociales』168号、査読無、2011年、112-115

〔学会発表〕(計 23 件)

1. ARIE, Daisuke 「Jonathan Edwards 's Critique of ' the deceitful feeling of liberty ' expressed by Lord Kames in 1751」 International Conference on Jonathan Edwards 2016, International Christian University. 2016.3.25 ~ 27.
2. 有江大介 「J.S.ミルのイエスとJ.H.ニューマンの神」日本ヴィクトリア朝文化研究学会第 15 回全国大会、2015.11.21、同志社大学
3. ARIE, Daisuke 「The Rise and decline of the ' Confucian Capitalist Thesis」 The XIII Conference of the International Society for Utilitarian Studies, 2014.8.20 ~ 8.22, Yokohama National University
4. 山岡龍一 「主権・政治・正義 近代国家概念の再検討」政治思想学会、2014.5.24、関西大学
5. Yamamori, Toru 「Voices, Visions and Vanacular Value」 Unterschätzte Gegenwart Bedingungsloses Grundeinkommen in Japan, 2014.1.25, Stadtcasino Basel/Basel (Schweiz)
6. 川俣雅弘 「厚生経済学の基本定理の歴史」経済学史学会第 78 回全国大会、2014.5.24 ~ 5.25、立教大学
7. ITAI, Hiroaki 「Jeremy Bentham on Government and Indirect Legislation」 The XIII Conference of the International Society for Utilitarian Studies, 2014.8.20 ~ 8.22, Yokohama National University
8. NAKAI, Daisuke 「Paternalistic Ideas in Nineteenth Century Economic Thought」 The XIII Conference of the International Society for Utilitarian Studies, 2014.8.20 ~ 8.22, Yokohama National University
9. 中井大介 「イギリス主流経済学における理想主義」イギリス理想主義学会、2014.8.30 ~ 31、南山大学
10. 有江大介 「我が国のアダム・スミス研究における水田洋氏の講演と意義：同感・ノミナリズム・ライブラリー」スミスの経済学の理論及び思想形成過程の実証的研究、2014.2.1、東京大学
11. 中井大介 「経済学におけるパターナル・アイデア」功利主義と公共性、2014.3.22、横浜国立大学
12. ANDO, Takaho (招待講演) 「French Thought Modernization in Japan」 The University-Based Institutes of Advanced Study (UBIAS), 2013.9.17 ~ 19, University of British Columbia (CANADA)
13. 中井大介 「ミルの経済思想の系譜：マーシャルとシジウィックを通じて」名古屋大学大学院経済学研究科ワークショップ

ップ社会経済研究、2013.12.26、名古屋大学

14. ARIE, Daisuke 「Leslie Stephen 's Agnosticism: Victorian Faith and Science」 The XII Conference of The International Society for Utilitarian Studies, 2012.8.10, New York University (USA)
15. ARIE, Daisuke 「Is Capitalism a Satanic System?」 The X International Milton Symposium, 2012.8.23, Aoyama Gakuin University
16. NAKAI, Daisuke 「Three Dimensions of Classical Utilitarian Economic Thought: Bentham, J.S.Mill and Sidgwick」 The XII Conference of The International Society for Utilitarian Studies, 2012.8.12, New York University (USA)
17. NAKAI, Daisuke 「Three Dimensions of Utilitarian Economic Thought International Workshop on Utilitarianism」 2012.3.24, Keio University
18. 川俣雅弘 「経済学史研究への科学的アプローチ」経済学史学会第 76 回全国大会、2011.5.26、小樽商科大学
19. ARIE, Daisuke 「Victorian Agnosticism and Bentham's Dualistic Appraisal of Religion」 The XI Conference of The International Society for Utilitarian Studies, 2011.6.22, University of Pisa (Italy)
20. 有江大介 「ヴィクトリア時代の金銭と幸福：幸せは金で買えるか」日本ヴィクトリア朝文化研究学会第 11 回全国大会、2011.11.19、甲南大学
21. 有江大介 「佐々木武・田中秀夫共編著『啓蒙と社会 文明観の変容』に欠けているもの」第 36 回社会思想史学会大会、2011.10.29、名古屋大学
22. 川俣雅弘 「チュルゴの『価値と貨幣』の合理的分析」経済学史学会第 75 回大会 2011.11.6、京都大学
23. 中井大介 (招待講演) 「ハイエクにおける経済的自由の意義 名古屋大学社会経済研究ワークショップ」、2011.1.12、名古屋大学

〔図書〕(計 19 件)

1. 山岡龍一・御厨貴・苅部直 『政治学へのいざない』放送大学教育振興会、2016 年、174-275
2. 山岡龍一・岡崎晴輝・北川由紀彦他 『市民自治の知識と実践』放送大学教育振興会、2015 年、12-72、256-265
3. 山森亮・落合恵美子他 『変革の鍵としてのジェンダー：歴史・政策・運動』ミネルヴァ書房書名、2015 年、105-128
4. 川俣雅弘・池田幸弘・小室正紀他 『近代

- 日本と経済学 慶應義塾の経済学者たち』慶應義塾大学出版会、2015年、347-371
5. 有江大介・深貝保則・戒能通宏他『ジェレミー・ベンサムの挑戦』ナカニシヤ出版、2015年、273-296
 6. 板井広明・深貝保則・戒能通宏他『ジェレミー・ベンサムの挑戦』ナカニシヤ出版、2015年、249-272、332-348
 7. 山岡龍一『岩波講座：政治哲学 6 政治哲学と現代』岩波書店、2014年、260
 8. 山岡龍一『西洋政治思想資料集（ジェレミー・ベンサム）』法政大学出版局、2014年、332
 9. 中井大介・諸泉俊介他『マルサス、ミル、マーシャル 人間と富と経済思想』昭和堂、2013年、288
 10. 有江大介『ヴィクトリア時代の思潮とJ.S.ミル：文芸・宗教・倫理・経済』三和書籍、2013年、73-95
 11. 川俣雅弘・船橋晴俊・壽福眞美他『規範理論の探求と公共圏の可能性』法政大学出版局、2012年、149-169
 12. KAWAMATA, Masahiro “Individual rationality and mechanism in the history of microeconomic theory” K. Yagi and Y. Ikeda eds. *Subjectivism and Objectivism in the History of Economic Thought*, Routledge, 2012, 29-47
 13. 山森亮『労働と生存権』大月書店、2012年、261
 14. NAKAI, Daisuke “Henry Sidgwick: Ethics, Psychics, Politics” BUCOLO, P. et al. *A Second International Congress about Henry Sidgwick*, 2012, 346-393
 15. 山岡龍一『西洋政治思想史：視座と論点』岩波書店、2011年、309
 16. 山岡龍一（監訳）『政治理論入門 方法とアプローチ』慶應義塾大学出版会、2011年、355
 17. 山岡龍一（共訳）『ロールズ 政治哲学史講義 1・2』岩波書店、2011年、868
 18. 山岡龍一・井上俊他『政治・権力・公共性』世界思想社、2011年、167-176
 19. 山森亮・中川清他『生活保障と支援の社会政策』明石書店、2011年、224-229

6. 研究組織

(1) 研究代表者

有江 大介 (ARIE, Daisuke)
 横浜国立大学・大学院国際社会科学研究院・名誉教授
 研究者番号：40175980

(2) 研究分担者

安藤 隆穂 (ANDO, Takaho)
 中部大学・全学共通教育部・教授
 研究者番号：00126830
 川俣 雅弘 (KAWAMATA, Masahiro)
 慶應義塾大学・経済学部・教授
 研究者番号：80214691

山岡 龍一 (YAMAOKA, Ryuichi)
 放送大学・教養学部・教授
 研究者番号：80306406
 中井 大介 (NAKAI, Daisuke)
 近畿大学・経済学部・准教授
 研究者番号：70454634
 板井 広明 (ITAI, Hiroaki)
 お茶の水女子大学・ジェンダー研究センター・研究支援推進員
 研究者番号：60405032
 （平成26年度より研究分担者）

(3) 連携研究者
 山森 亮 (YAMAMORI, Toru)
 同志社大学・経済学部・教授
 研究者番号：90325994
 （平成26年度より連携研究者）